

フンザは日本を感じさせるとても素敵な場所なので、若者のみならず日本の年配向けのツアーもあるようだ。

一週間の日程で 35 万円。その金額にも驚いたが、さらに驚いた事がある。

日本からイスラマバードまで飛行機だが、何とフンザまでバス。

このバス、20 時間ぐらい掛かるのだ。貧乏旅行ならいざ知らず、高級ツアーでバス 20 時間ってのはひどい。

しかも通るのはカラコルムハイウェイ。土砂崩れが時々あり、簡単に通行止めになる。

先日も地震があって、1 日に通行止めになった。

実は、フンザから 2~3 時間離れたギルギットには飛行場があって、イスラマバードから飛ばったの 1 時間である。

しかしこの飛行機は有視界飛行で、天候が悪いと飛ばない。

そしてこの季節は天候が良いので毎日飛ぶが、紅葉シーズンだけに常に満席になっている。

だからきっと高級ツアーもバスなのだ。

ところが、ラッキーな事にこの飛行機に乗れることになって、あっという間にイスラマバードまで戻ってきた。

飛行機ってめちゃめちゃ素敵。



飛行機から見た 5 千メートル級の山々。飛行機も丁度高度 5 千メートルぐらいを飛んでいるようだ。

もう帰国が近づいている身としては、時間を金で買うしかない。

だからイスラマバードの空港で、どこか面白いところへ行けないか探してみる。その時間帯にフライトがあったのは、UAE 行き。何でドバイに戻らにゃならんのだ。

首都のイスラマバードから、インドを飛び越えてバングラディッシュのダッカまでのフライトもあったのだがあいにく満席。

そして意外にもインドへのフライトは無いのだった。ラホールまで行けば、デリー行きのフライトがあるらしいのだが、ラホールは国境まですぐ側である。

結局、イスラマバードからラホールを通り、陸路でインド入りする事にした。

Daewoo のバス

イスラマバードのバスターミナルは、フンザに行く時に行っていたので知っていたが、それでも念の為、空港の人に聞くと、『ダエウバスターミナル』という違う場所を紙に書いてくれた。

おかしいと思いながらもタクシーに乗って行ってみる。

運ちゃんが連れて行ってくれた場所には、確かに『Daewoo』と書いてあった。そうあの韓国の大宇なのである。

背景はよく分からないが、通常のバスとは別に、Daewoo が、Daewoo 製のバスを使ってバス事業を行っているようだった。

バスターミナルも通常のバスと違う所に専用に使っているらしい。

このバスの売りは定時出発。パキスタンのバスによくある “ 満員になったら発車 ” ではない。Daewoo のバスはしっかり定刻に出発するらしい。

そしてもう1つの売りは高級感。イスラマバード~ラホール間は4時間半で420ルピー(720円)。高速道路を通るといってもこれまでのバスに比べて格段に高い(因みにイスラマバード~ギルギット間は15時間で560ルピー)。

バスターミナルの窓口では、整理券をまず配る。そして発車の15分前にチケット発売。整理券の番号順なので横入りは一切なし。英語もOK。

ターミナルにはバスが停まっていた。パキスタン名物のギンギラバスではなく上品な感じだ。乗り込む際に、金属探知器でチェックされる。そして発車5分前には、乗客一人一人をビデオカメラで撮影していた。飛行機でもないのに飛行機並みの厳重さはちょっと嫌な感じだ。次に乗る機会があればDaewooはやめておこう。



韓国 Daewoo が経営している？高級バス。金属探知器だけでなく、乗客のビデオまで撮る。

車内で我々を迎えてくれたのは、きれいな制服に身を包んだ笑顔のパキスタン女性の添乗員。職業婦人でさえ珍しいのに、西洋風の洋服を着た女性はなお珍しい。キラキラ光っている。

飛行機でもないのに飛行機並みの美人さは、とてもいい感じだ。次に乗る機会があればやっぱりDaewooにしよう。しかしパキスタンにもこんなバスがあったんだ。

定刻通りに発車。パキスタンの道路ではクラクションをガンガン鳴らすこと当たり前なのに、このバスはまったく鳴らさない。いたって静かに道路を走る。

そして、頻りに飲み物が出され、食事のサービスもある。毎回パキスタン女性のスマイル付き。聞くとところによると、どうもこのDaewooのバスは、飛行機並みのサービスを目指しているようだ。そういえば、乗っているのはビジネス客ばかりだ。

ラホール

到着したラホールは、実に悪名高い場所である。

泊まっている部屋のタンスの後ろがガバッと取れて、男が3人入ってきたとか、天井の板が開いて入ってきたとかで、盗みとレイプの噂話は旅行者の間でよくささやかれる。

一番シリアスなある男性旅行者の噂話はこうだ。

夜、仲良くなったホテルの主人にチャイを奢ってもらう。ところがこれが睡眠薬入り。朝起きる

と、どうもお尻の穴がヒリヒリする。うわっと思えばちり目を覚ますと、何と左手には金が握らされていた。お尻のヒリヒリもそうだが、その金を見て涙が止らなかった・・・、というストーリー。

事実かどうかは別として、パキスタンにはホモが多いらしい。

一時期、日本でも流行った【世界が100人の村だったら】も言っている。『100人の内、11人が同性愛者です』と。

外国人もラホールでは警戒しているようで、安全と言われるホテルに客が集中してしまう。私が泊まったホテルもこの日は満室で、併設しているネットカフェの床で寝かせてもらう事に。いつもはベッドくらいはあるんだけど、というオーナー。

聞けば白人ばかり18人のツアーが泊まっているらしい。

ツアーで安宿？と興味が湧いたので、カナダ人のカップルをつかまえて聞いてみると、確かにツアーだった。

トルコ/イスタンブールを出発し、ネパール/カトマンズまでの行程。添乗員付き。期間は4ヶ月。時々だが食事込み。キャンプと安宿が半々らしい。

ネットのサイトで申し込む形式で、他の客と会ったのは出発地のイスタンブール。値段は2500ポンド(ざっと50万円)。

飛行機を使わない割にちょっと高い気がするが、その土地その土地での楽しみ方を知っている案内人と旅をするのは実に面白いはず。

このラホールでも、スーフィーと言うイスラムの神秘主義？の宗派があって、毎週木曜日になると、太鼓の演奏会があるのだった。早速ツアーの人たちと一緒に試してみる事に。

感動を上手く言葉で伝えるのは難しいが、リズムカルで不思議な感じ。

ジャンルも手法も全く違うのだけど、インドネシアのケチャクダンスを彷彿とさせる。

ツアーの人たちの中には、一緒にリズムを刻み、トランス状態になっている人もいるようだ。

ツアーと言うと高級な感じがあるが、行く先々でこういうサービスがあるなら凄く楽しいだろうな。

一人旅は自由気儘だが、感動を共有する人がいないという点だけは残念なのだ。

ところで、アメリカ人が深夜になっても、私が寝ている横でネットをやっている。

『www 何とかかんとか。シーオーエム エンド エンター オーケー』

実況中継してくれんでいいっての。でもお尻の穴より、耳の穴をふさぐ方がましなのでガマンガ



スーフィーでの太鼓の演奏。太鼓にあわせてトランベツも登場。なんか不思議な魅力のあるリズムだった。

マン。

パキスタン~インド国境へ

ラホールからバスに乗り1時間強行くと、そこはもうインドとの国境である。

インドに近いから、かなりイスラム色が薄いかと思っただが、全然そんな事はなかった。イランで見たような、全身真っ黒という女性が多い。バスの車内は4:6ぐらいで男性と女性に仕切られる。

仕切りは扉がついている白い金属製のもので、かなり高いので、座ってしまうと女性の姿がほとんど拝めない。

車掌が集金に行く時だけその扉は開く。車の後ろに位置する男性の方はきつきの満席。一方女性の方はそうでもないみたいだ。

でもまったくお構いなし。



パキスタンのバスの中。白い仕切りで男女が別れている。国境近くなのに、向こう側には黒い衣装に包まれた女性が多い。

映画【ガンジー】では、この国境付近のシーンが出てくる。

ガンジーの願いとは裏腹に、結局国が分裂する事になり、東に住むイスラム教徒は西へ(パキスタン)。西に住むヒンドゥー教徒は東へ(インド)移住を開始する。その延々と続く大引越しのシーンは圧巻だ。

イギリス統治時代でも、当時のインドではイスラムも一大勢力だったので、パキスタンの土地への移民はかなりの人数に登り、その人たちがパキスタンの政治の中心を担ったらしい。つまりパキスタンではよそ者による政治だったので当初はなかなか上手く行かず、パキスタンはインドに比べて経済成長が遅れたのだ、という話を聞いた事がある。

その後、パキスタンとインドは戦争を繰り返す。二国間の国境は延々と長いにもかかわらず、現在開いているのは、このワガ国境だけである。

到着したワガ国境は、ラマダンということもありとても寂しい雰囲気だった。

とその時、荷物を満載にしたトラックがパキスタンボーダーに着いた。

どこから現れたのか、30人ぐらいの白い服を着た人たちが、次々にトラックから荷物を降ろし、肩に担ぎインド国境へ向かう。



国境に着いたパキスタンのトラック。そして荷物を降ろし、次々に運ぶ白い服に身を包んだパキスタン人。

とても賑やかになってきた。

いわゆる国境貿易だ。聞いた事はあったが、見るのは初めてだ。

普通はトラックごと越境するのに、どうもパキスタンからインドへこのトラックは進めないらしい。

白い服の男達が進む先は、緩衝ラインを超えて、インド国境まで行く。そこには国境線が引いてあり、そのギリギリまで進む。

今度は、その国境線で待ち構えていたインド側の青い服を着た男たちが荷物を受け取る。白い男から青い男へ荷物が渡される。

青い服の男達は 300 人ぐらいいる。白い男達の 10 倍。それって、まさにパキスタンとインドの人口比じゃないかと笑ってしまった。



緩衝地帯はあるものの、きちりと引かれた国境で、白い服から青い服のインド人に荷物が手渡される。

パキスタン側もインド側も走っている人がいて、日雇いというよりは、1 回あたり幾らと決められているようだった。

中身は残念ながら何だか確認できず。

元々同じ国だったこの 2 国。文化も習慣も、生産する物資も似ているはず。関税を払ってまでやり取りする物資って一体何だろう(一説によると、パキスタンと仲の良い中国製品が、パキスタン経由でインドに入っているとは聞いた事があるが、Made in China とは書かれていなかった)。

白い男から青い男へ荷物が渡される際に、ちょっとしたいざこざもあった様だ。

白い男が青い男に荷物を投げ付けている。青い男はよけたので、荷物はひどい音をたてて地面に叩き付けられた。にらみ合う二人。思わぬところで印パキの対決。

白い麻の袋の中は木箱のようで、すっかり壊れたようだった。荷主は知らんだろうな、可哀想に。

この荷物以外には、インド~パキスタンの行き来はほとんどない様だった。

私がいた時にはインドからの一家族がパキスタンに行っただけ。

台帳も見てみたがほとんど旅行者ばかり。最近は特に和平ムードが高まってきたが、草の根レベルではまだまだの様だ。まずはビジネスからというところだろう。

初インド

いよいよインドに入国した。

まずはインドの概要。



1.面積：3,287,263km² (印側資料:パキスタン、中国との係争地を含む)

2.人口：10 億 2,702 万人 (01 年国勢調査) 人口増加率 1.8%

- 3.首都：ニュー・デリー（New Delhi）
- 4.人種：インド・アーリア族、ドラビダ族、モンゴロイド族等
- 5.言語：連邦公用語はヒンディー語、
他に憲法で公認されている州の言語が 17
- 6.宗教：ヒンドゥー教徒 82.7%、イスラム教徒 11.2%、
キリスト教徒 2.6%、シク教徒 1.9%、仏教徒
0.7%、ジャイナ教徒 0.5%
- 7.識字率：65.4%（01 年国勢調査）
- 8.略史：1947 年イギリス領より独立
1950 年インド憲法の制定
1952 年日印国交樹立、第 1 回総選挙
1990 年代 経済自由化政策の推進



インド国境で

国境を出ると、レストランがあったので飯を食うことに。というか、まずはビールでしょ。650ml で 80 ルピー(198 円)ととても高いが仕方がない。日本のビールとは味がだいぶ違うが良く冷えていて美味かった。

パキスタンの庶民の足は、スズキであった。ところがインドではリキシャである。

語源は日本の人力車だ。

リキシャには 2 種類あって、オートリキシャと普通のリキシャ。後者は自転車リキシャだ。

ただでさえ死にそうな爺さんが自転車リキシャに乗ってこちらに視線を送っている。

ラホールで知り合った日本人の方と一緒にだったので我々は二人。荷物もある。いくらなんでも無理だろう、と思うのだがどうしても自分のリキシャに乗ってくれと言う。

拷問に近い様で気が引けるが、その方が彼にとっていいというなら彼の為に遠慮なく乗りましよう、という事になって乗ってみる。

漕ぎ出す爺さん。

パワーが足りなくて、ペダルを一周できずに、しばらくギーコギーコ往復運動をして、ようやく自転車を漕ぎ出した。

さっきから、ヒューヒューと細い管を空気が出たり入ったりする音がする。耳を済ませば、どうやらこの爺さんから聞こえてくるみたいだ。

ハアハアという息遣いじゃなくて、ヒューヒューという空気の漏れる音。ちょっと怖い。

これ、登りかなあというくらいの微妙に感じる坂でもう死にそうな感じで漕いでいるのが切なかった。

ヒューヒューが、何時の間にかゼイゼイになっていた。

さすがパンジャブ州だけあって、豊かな土地であることが分かる。

菜の花? がきれいだった。

数年前まではこのあたりに戦車が配備されていたらしい。時代も変わるもんだ。

などと、景色を見るが、やはりこの爺さんが気になる。

たった 2 キロだが、30 分ぐらい走ってバスターミナルに到着。倍の 20 ルピー(49 円)払ってあげた。



国境からバスターミナルまで2キロの道を運んでくれるリキシャのオジイ。もうゼイゼイって切なかった。

昭和 33 年に、自転車は 16,000 円、大学卒の公務員の給与は 9,200 円だったという。

現在の価値にして実に 50 万円近かった訳だ。

今のインドでも、人件費に対する自転車の価値は、恐らくそんな感じなのだろう。いやそれ以上に違うない。

この爺さんは、胴元からリキシャを借りて働いている。

いつの日か、自分のリキシャを持てるといいね。

つづく